酒十態

此の記事の中、御本人が（他人は然らず）悪口であると思召さるゝ点は、皆事実無根の事柄であると豫め申上げます。

一ちやん。飲めあい口だった。酔へば忽ち河鹿の様な声をはりあげて「一寸様さげてペロリ〳〵」は堂に入ったものだ。

英坊。古昔王城の地、京育ち、酒を飲んでもビールを飲んでも後でウイスキーを引っかけて踊る姿は比佐良掴くのモダンボーイだ。

九郎ちやん。長い鼻を中心に顔中真赤にあっても牛の如く飲み馬の如く飲む。飲んでジユン〳〵として（漢字制限以来こんな字は忘れちやった）鼻歌をうたふ。

ゲレさん。広い額が櫻色にあり、耐久煉瓦色にあっても、一橋山岳部、如水会山岳部、針葉樹会が、泡と（しよに口角に上る山岳会の逸話役。

謙坊。要領よく立廻って略断せぬ。平の小屋では密造酒を茶碗に二杯引っかけた時は流石に家が傾斜して見えたそうだ。美味そうに、あをしゝの肉が煮えてるのを横眼で見て、毛布をかぶってねてたっけ。

近ちやん。此の人（？）酔へば踊る。両手を左右に交互に上げる運動と両足を蹴る様に後に曲げる運動のコンビネーションだが、御本人（？）は、これを踊の真髄と考へてゐるらしい。おけさであらうが、木曽のナカノリサンであらうが東都の流れであらうが、皆此の一手だ。万世一系の感がある。近い中には野沢小唄もこれで踊ることであらう。

サミさん。この人の酒を飲む席に伺候したことがないから知らない。飲まして聞き度い話がある訳でもないが（度と思ってゐる。嗜まれないかもしれない。

トンちやん。お酒には強い。その上謙坊と違った意味で要領よく飲むから酔った所を見たことがない、中将湯とどっちが身体が暖まるかしら、

化ちやん。外から見た程獰猛ぢやない。本当極めて内氣なのか、それとも泣き上戸なのか、一度

江き言、繰返す時に会った印象がなほ残ってゐてしほらしい。

孫さん。さてドンジリに控えしは凄い豪の者。飲んで乱れず。近ちやんあたりの持ち合してるものよりもっと大きな風呂敷は立所に拡げる。幅三間のカレイふんぞ小さえ小せえ。（ペン公）

酒

物の價値は何に依って定まるか　それは原理の説いて、解き得ざる所である。それもその筈さ、價値は財貨に固着するものでも又其れ自体存在し得るものでもない。價値は經済人が具体的財貨が其の慾望充足に関係せるを認識する事に依りて生ずる重要性であって人間の意識の外には存在し得ないものだもの。

全様にして俺と生活とを関連せしむる処のものは、慾望の塊である。　従ってうれしい事に價値の現象が俺の生活にも起るとすれば、この塊の上より外にはないけれども、それも決して誰れにでも通じる筈さや楽しさではあり得まい。

生活とは何等か興味のある限りに於て人の生きてる状態をいひ表はす言葉である。

人間はその生活目的を彼の全生活の享楽の総量の最大に置く。多くの享楽の間に撰擇をなす地位にありながら、その総てを一々完全に享楽し得る自由を持たぬ俺達が、個々の享楽の絶対量に於ては各異るにしても、その享楽の総量の最大たらん事を望むならば、先づその最大なる享楽を完全に享楽する事をやめて、各々の享楽の大きさがその享楽をやめる瞬間に於て、総てのものに就いて均等になる如くする事だ。

けれどもそれが間違なく出来る位なら何も俺はいちごのために苦をうけつゞけはしない。俺はまあ生れつき上品に出来てるんだから仕方ないとしても、永代の下に沈めてある鉄函のやうな胃と御成街道の下に埋めてある地下鉄のチューブの様な腸を持つペンや近にして尚且つ屬々盲腸までも使って迫っ付かなくなるのを思ふとき、心と身体が如何に健やかなろうとも楽しく生きる事の如何にむづかしさかを悟るのだ。

酒も財貨である。従ってその價値は酒自身にあるに非ずして人が之を楽しむ処に生ずる。努めても楽しくなりにくい今の世に酒は又何と手もなく人を楽しくする事か。　酒でも飲まうかと思ふときは、今迄迫つた享楽をやめる事によって総ての享楽の限界利用が均等になるときであり、酒の後に於ける以前の享楽は酒に依る漸減法則中断に依って大となる。

ペン、近酒に親しむを聞く今、その意識せると

せざるとを問はず俺は飲まずにはゐられまいと思ふ。酒も財貨である。價値は慾望の橋の上に生ずる。だから酒には生活と全様客観的の價値はふいけれども。（バッタ）

山を征服するといふ言葉

こんな文字や言葉をよく見たり聞えたりする。その度に変な気がする。この人は一体山の威大さを知ってゐるのかなと。

暁に時をつくって威張りちらしてゐたヲンドリが鷲にさらはれた話を思ひ出します。

征服といふと強がりにも聞えるし又無智にも聞える、併しこの部類のものはまだいゝとしても誇らかに山を従属し得たかのやうに云ふに到っては我慢がならぬ。

こんな言葉は慎むがいい。

山は Physical には登り得ても全人格的に従属せしめ得るものだと考へてゐるのだろうか、そんなのは征服といふ言葉の意味すらわかってゐないのだろうと考へたくなる、山の懐を知らぬ登山者は時々征服したなんていゝたがる、朝日新聞がよくこの言葉をつかってゐるのでこの新聞にはどうしても好意が持てぬ。

僕一人ぢやあるまいと思ふ。（栄司）

「練習」といふ言葉

練習といふ言葉がある、岩登りの練習、スキー練習等々。此の言葉は方々で使ってゐる。各学校の年報にも大衆（？）登山團体の機関紙にも。私自身も度々使った事がある。けれども此の言葉に対して最近一すした「？」を感じてゐる。自分だけかも知れない。松方氏の此の問云はれたやうに登山といふもの、対象を全地球上に置けば、そしてそれへの段階といふ意味からわかる。けれどもそんな大それた考へは持たずにやってる人も可かりあると思ふ。そういふ意味から云へば練習といふよりも「エンジョイ」といふ方があたってゐる様な気がする。

ひまふきのだからこんなことを考へました。浦松さんこれはどんなものでせうか。

大阪の事

心齋橋筋の時計屋へ這入って腕時計のガラスを入れて貰った。入れてから「いくらだ」と聞いたら「十五銭」といふ。「何んだ、ガラスの入れ換へが十五銭？」「ガラスが違ひまっせ」「何を云ってやがるだ　ガラスの良し悪しふんてこっちとらには解らねえや、何処へ行ったって十銭と相場

はきまってるんだ、ふざけるね え」とは云はふかったが結局十五銭の所三銭まかさせてやった。それでも二銭高い。　諸君大阪へ行ったら買物の場合云値から二割以上引いて銭を拂ふ事。暗算の出来ない人は算盤を持って行く事。尤も算盤ふら大阪へ行くとお寺にも幼稚園にもある。

●大阪へ行くと本屋がふい、あっても賣れふい本は賣ってふい。第一丸善支店からしてそうだから呆れてしまふ。

●会社バスへ腰の曲ったおばあさんが乗りこんで来た、若い学生の前に立った、終点まで学生は一人として立たふい。

●ニキビの一ぱい出いた中学生が三笠山へ五六人登って来た、若い女が登って来るとヒヤカしてゐる。こんふのは東京にも居る。けれどもその言葉たるや「ヨー云ハンし」だからがッカりしてしまふ。益々以って張り飛ばし度くふる。

藤木さんの本を讀んで

●時と所によって人工的補助の限界は異って来ると思ふがどうだろう。

●より多き能力の所有者が人工的補助を用ひずして登降し得る所を、彼以下のものがそれらを用ひて登降した場合、彼は排難さるべきか。登山が何処までも主観的のものであらば許してもいゝだろう。　然し客観的に見た時可ふりの不快を能力者に感ぜしめることは事実だ。　さすれば登山の社会性をも認める自分にとって以上の如き場合には登降を遠慮すべきだと思ふ。　但し偶然、以上の如き場所に到って事生命に関するやうな時には総ての理論は消滅しふければあらない。

熊（五・六・一四）

俳句

唐沢の岩小屋の上に寝ころんで四人の若き人々が折から北尾根の上に上った十三夜の月をふがめて居ります

先程から其の内の一人が「満月や満月やし」と云ってしきりに下の句を探して居りますが仲々出て来ません

処が隣に寝てゐた一人が「満月や今宵ぞ北尾根春夏ひけり」と一句ものした如が他の三人は下の句を出せふかったくせに笑ひました。皆さん此の一句のどこら辺がお可笑しいのでせう。（狸）

山吹・水・青葉

地蔵峠の残雪を踏んで尾根通の径を東に降る。

急降だが茅戸の柔かな觸感が靴の底を透して足に快い感じを與へてくれた。徑は太陽寺の庭を通つて大血川の溪へ降つてゆく。　物さびた庫裡、行ひすました方丈のものごし、　説教をきゝに来てゐるらしい里人の長閑な姿は早春山村の一幅の絵だつた。　それにもまして、大血川の谷を埋めて、たゞ見る限り今を盛りと咲き乱れた山吹の、若葉に映ゆる美しさ、思はず前途を急ぐ足を止めて其情景に眺めいつた。仰げば妙法嶽のあたり、はや夕霧にとざされ、里にも山雨のそゝらんとする様子が見えだした。

○

熾く様な初夏の真晝の陽を背一杯に受けて喘ぎながら山路を登つて行つた。　權現の三角点は真近になつてはきたが、草いきれと渇にせめられて目も眩む様だつた。水筒の底には一合に足らぬ水があるばかり、芦垣の部落まで少くとも三時間は焦熱地獄の徑をゆかねばならなかつた。　と突然左手の山腹に人家が二三軒あらはれた。水があるに相違ないが相當の距離があるので前途を急ぐ身の暫時迷つたが到〻水に引かれて山腹の徑を辿りはじめた。暫く行くと、ゐゝ家だ、が澤にのぞんだ炭焼小屋で涸澤だつた。　段々近づいてゆくと生々しい焚火の跡に残る茶罐一個！　矢庭に蓋を取つた。水だ！　水だ！　夢中で飲んだ。茶罐の口から。　水筒も満した。　誰の小屋だろう？　どう感謝していゝだろう？　暫く考へて居たが十銭白銅を茶罐に入れて其小屋を出た。

○

山中湖畔から籠坂峠まで登りつめると俄然すばらしい大観が展開した。　大海の様な青葉のひろごり、殆んど際涯なしと思はるゝばかりに連る翠の波、銀蛇の様に走る一條の道、何といふ大きな眺めだろう。　山頂の大観とは又異つた端麗な和やかな眺望だ。其縁の丘を車は四十哩の快速で矢を射る如く駆せ下つた。　（孫一）

○

四月の上旬には学校の山岳部の人達と一緒に飯へ行きました。　浮土の肩は見晴のいゝ事に於て日本一のスキー場である事を吹聽して置きます、帰りは針の木を越して大町へ出ました。　お天気がずつとよかつたので何よりでしたが未だに眼鏡の跡が白く残つてゐていけません。　日本では登るにも眺めるにも春の山が一番いゝと思ひます。少くとも三月の下旬から五月の末までは山が清々しさを持つてゐます、冬のやうにいぢけずに暢々してゐるのも此の頃です。日本へ飯つてから始めての春の山ですが矢張り春はいゝなあと思ひました。

×

五月の末に学校の部の人達多勢と三ツ峠山へ遊

だにゆきました。あすこの岩壁は高さから来る痛快さがありません。併しその代りに谷の向ふ側の緑の間に咲くつゝぢの眺めはそれを補ふのに十分でした。岩を攀ぢふがらつゝぢの燃えるやうな赤さを眺める。　そんな酒落た真似は一寸外ではありますまい。但し夜行で寝ないで行った為眠いのには弱りました。　おまけにその日は曇り勝で時々霧がやって来ては寒不足の顔を冷くなでゝゆくのには嫌な気持にされてしまいました、お天気のぱりぱりした日に煙草でも持って行って岩壁の途中のテラスで青空へ烟りをふいたらさぞ楽しかろうと思ってゐます。

学校の人達が岩にしっかりしてゐるのも驚いた事です。このまゝどんどん延びて行ったら、そして山にもっと本気になって精進したらいゝ加減の理窟をこねまはしたり、一人よがりでゐる学校の連中よりは遥かに素晴らしいクライマーの輩出する事は確実です。　何より心強く楽しい期待です。どうぞ針葉樹会の方々も折にふれて力を借しいゝ意味で後援する事へ気を付けられる様お願ひしたいと思ひます。　（佐美太郎）

○

近頃余り山へ行く機会が無いが先日久し振りに山らしい気分を味ふことが出来て嬉しかった、会社の目下係りの連中と伊賀赤目四十八瀧へ行ったのだが簡単に行ける割合に面白い所だ、地図で見たらこんな所がと思ふ程だが実際の方が余程面白い、其の時片道は徒歩といふ事にして其の行程は約三里半と話して行った所が其の日電車を下りていざ歩こうとすると自動車がやって来て何処へ行くかと聞くから赤目へと云ったら仰山な顔をして飛んでもない、今から赤目へふと歩いて行かれるものか」といふ「何里あるか」と聞けば「六里半」といふので連れの連中もすっかりへこたれてしまった、六里半ぢとても歩けないといふ、聞けば自動車の通る道を歩いてのことだ、こちらは間道を行かうといふのだ、不安な連中を納得させて出かけたが、其の道は相当にやっこしい道だった、然し何等迷ふことなくまた誠に気持のよい道で赤目の瀧も亦一寸面白い、一緒に行った連中すっかり有頂天になってしまって、流石は登山家だけあるとて感心すること、感心すること、こんな連中に感心されたってあまり名誉でもないがそれでもやはり悪い気持はしないのは妙だ、伊賀方面は谷が面白そうだ。　（トンノ公）

○

空の色がすっかり真夏の姿ひを疑らして来てからは、更らにだに退窟なオフイスの午後の筆の運

びの鋭い事。一字一字を投げ出す様に原稿用紙に叩き付けて行く私の耳もとには街頭の雑音とタイプの噪音のみが徒らに高い、明けても暮れても筆とる身とはせめて家にある自由の時だけはペンと紙と活字とから解放されたい、手紙一本書きたくない、只それだけを思ふ。

斯くてある身に山は余りにも遠い、假し一週間や十日此の現勢から脱れ得ても、それはあまりにも淡い夢ではないか、後には只永遠の労苦が更らに重く果てしなく自分を待つてゐる足けではないか。夏山の混雑は、私をもう山へは惹き付けない。けれどあの白い入道雲を見ると私の心は躍る、岩と雲と蒼空との美しい交錯が私には忘れられない。

東京の仲間がしきりに山へ行く便りを私は羨ましいと聽く、私も一処に夏山のルフトを呼吸して見たくも思ふ。私の心は見知らぬ峯を攀じ見知らぬ谷を逍遥ふ、山は矢張り私にとって恋しいものなつかしいものでしかない。

然しどう考へて見ても今年も矢張り駄目らしい、今の私が山旅を思ふのは乞食が百万長者を夢見るのと何んの相違もない、あゝ山は遠しだ。

（五、六、一。英坊）

○

大阪へ行って六人で六甲に半日遊んで来た。五十嵐と葛子さんは一対、高木と文栄さんは一対、九郎ちゃんと俺も亦別に一対だ。

自慢ぢゃないが東京の奴で文栄さんに拜顔の栄を得たのは俺だけだろう。一寸感想をと云はれるとほんとに英ちゃんに似合ひのフラウだ、高木が今女界の愛讀者なる事は誰も知ってる、実際その望み通りの奥さんだ、暑さ寒さも知らずに大きくなったやうのお嬢さんだ。従って其の御家庭はオヒナ様のマヽゴトみたいだろうと俺は余計の想像をした。

六甲行の三対の紀念寫真が沢山俺の所にあるから、お寫真でも拜見したいと思ふ人は来てくれ、拜観料はとらんよ。

○

動けなくなるまで歩いて見度い。うんと岩にへばりついてみたい、青天井の下に大の字なりに延びてみたい、そしてどこってもみたい、岩陰で胃の腑の隅までも煙草が吸い度い。等々慾求のみの世界に住んで居った自分もやっと夏の休暇が近づいて一週間でも慾望の一部でも満足させられる時が近づいて来た事を思ふて、独り小躍りしたい様だ。

（三角）

部室から

部員総数三十六人、内本科二十三人、私達の部は近頃にない膨張振りです、その二十三人がいづれも講義には出ずくても、部室に出勤するのは決して忘れない人達ですから、一棟の部室は何時も大入満員です、数日前、部室の談話にゼミナールに出るのを忘れた人があった位に誰もが部室を愛してゐるのです、唯去年は豫科から二三日毎に誰かゞ遊びに来たものですが、今年は石神井や池袋辺に住む人の多い為か、豫科の人の姿が部室に見えないのが少しかからず淋しい事です。

その部室に部員が数人居る時、屢々行はれるのがアミダかゞる現象です、誰れかゞ「おい、やらうぢやないか」と口を切れば、「うん、やらう」と應じる人がある、そこで主催者が籤を作る、誰もが爭って引いた残りが主催者のものとなって、あけて見れば、十五銭、十銭、八銭、六銭、四銭、零といふ割當、更に主催者の手に持つ六本の燃寸の、頭の無いのを引き當てた人が食堂の親父の所まで使に遣られて、そこで皆が七銭のアイスコーヒー一杯にありつく仕組です。

不思議な事に十五銭取られた人は大低お使も當る。

主催者が決して得をしないのも愉快です、このアミダは毎日の部室の行事の重要なものゝ一つになりました。

近頃大分下火になりましたが、一時珍妙なゲームが部員の間に流行した事があります。中に外来語を使ふ事を禁じ、それに違反すると一語五銭の徴罰に付せられるのです。一時間に少い人で一語か二語、多いのになると十以上も言ふ人があります。これが始まると机の上に「朝日」なんて見慣れない煙草が現はれたり、「からい飯」と言って辛じて無事に昼食にありついたりします。

その罰金は大低は國立ヒスッテの建設資金に繰入れるのです、野球が一時盛んで、よく二年対一年の試合なんかやって、針葉樹会に出るのが遅くちって叱られた事もありましたが、最近めっきりやらちくなりました、それは暑くなったのと　雑誌の仕事が忙しくなったからで、決して某君の名誉の負傷が祟ったのぢやありません。

処でその雑誌のことです、最近一年半の私達の山行の決算が近く「針葉樹第五号」として現はれるのです、四月頃から二年の人達が中心になって編輯に努められた結果、愈々校正に掛るまで漸く着けました。　今月末には出来上る筈で

すからその節はどうぞたび〳〵しく御質上の程とお願ひ致します。

近頃部の仕事をする人達が皆頗るガツチリしてきました、椅子に土足を載せたり窓から出入すれば忽ち徽罪に付せられるし、山に行く時には行程の詳細を部室に掲示せねばなりません。それから今迄稍々乱雑にあつておた部の備品圖書を中島、園山、丸茂三君の努力で着々整備しつゝあります、最近は二人用天幕が昨年秋以来行衛不明にあつてゐるのを発見して　部員一人々々の記憶を訊して、まるで探偵か何かのやうな事をやつてゐます。

また近く部員の藏書目録も出来上る筈であります。

そろ〳〵梅雨に入つて、夏山の計畫も蠢ふ頃となりました、例年からもう誰もが夏山の準備に夢中になつて居る頃でせうが、今年は誰もあまり気乗りがしない様でもありませうが、それよりも私達の山登りが夏に限らずくあつたら為だろうと思ひます。

一般から参加者を募集するのは蒸槍の、（班に留め、部員の作つた班も烏帽子槍、立山剱、茶師から黒部源流、笠から槍、穂高、聖赤石等の数班でこの計畫も外部に發表はしない事にしました、上高地には昨夏新調した豪遊な天幕を張りますから数日の暇を持たれる方は是非お出で下さい。

部員の大部分もベースキヤンプに滞在して穂高の岩攀りをやりますから、可成賑かな筈です、尚穂高では浦松氏に御指導願ふ事にして居ます。

今は氣乗りがしないでも、梅雨霽の空に輝しい夏の太陽を仰ぐやうになつたなら、きつと誰もたまらふくなつて、毎晩四五人づゝ飯田町から、うれしそうな顔を満員列車に積込まれて行く事あるのでせう。

次に岳聯の事、五月の總會で私達は委員数に再選されました。　相変らず聯盟の中心になつて努力してゐます、委員は磯野、高瀬、小川の諸君、岳聯も創立の話が持上つてから一年、今までははんとうの準備時代でした。之から真に仕事が始まる訳です。

最後に今年四月からの部員の山行の様子をお知らせしたければならない筈ですが、それは近く発行される針葉樹五号までお預りの事にさせて下さい。

（増山）

消息

近藤恒雄　市外馬立町字清水窪三、七。七、
高木英二　四月二十五日結婚式を挙ぐ、新婦は文栄さん、
兵庫縣武庫郡精道村伊勢講田五四九
松倉栄司　五月七日長女誕生、名は奈津子さん、
　　六月四日太平生命保険株式会社に就職
　　稿要二、
す、著く外務員を為す、
吉澤一郎　雑誌「山と渓谷」創刊号に雲取山に就て寄稿す、
浦松佐美太郎　改造七月号に「岩と氷斧」と題して寄稿す、
矢作太郎　本郷区駒込林町八二丸善工場内
曽田荘太郎　健在なれど行務多忙の為、針葉樹会の出席も不可能にて投稿も出来ぬ。

記録

（自四月一日　至六月十日）

四月五日―六日、八風山―神津牧場、
奥野綱重、村尾金二、曽田荘太郎、松木謙三、
四月七日　十八日、富山―剱岳―針ノ木―大町、
四月二十日、三峰・地蔵峠・大血川の谷　浦松佐美太郎
赤目四十八瀧　中川孫一
三ツ峠山　五十嵐数馬
百蔵・扇・鷹現、　浦松佐美太郎
三ツ峠山・籠坂越　中川孫一
陣馬・景信・高尾山、　中川孫一
松木謙三
十一日、穂高岳
村尾金二・近藤恒雄
五月十一日、赤目
五月廿四日　三ツ峠
六月一日、百蔵・扇・鷹現
六月八日、三ツ峠山・籠坂越
仝　日　陣馬・景信・高尾山
六月七日　十一日、穂高岳
村尾金二・近藤恒雄

編輯係からの御願ひ

一、原稿は原稿用紙に明瞭に書いて下さい、
一、記録を出さない方もありますから忘れずに一日の山行でも必ず御通知願ひます、
一、会員にも相當詩歌の才能のある方もあるのですから時々は御投稿を願ひます、
一、氣に入った山の感想とか紀行の一部とか他の本でお目にとまりましたら知らせて下さい掲載しますから又漫画等も歓迎します、

第三号予告

夏のシーズンには必ず何処かに出かけられる事と思ひますから第三号はその山行の紀行の一節とかエピソードの様なものばかりを掲載したいと思ひますからどうぞ原稿は其の御積りで願ひます。